

ミャンマーの青磁

吉 良 文 男

はじめに

ミャンマーの古いやきものとしては、中国の史書に表れる驃国の青埴あるいは琉璃瓦の記述（注1）やイブン・バトゥータの旅行記に記された「マルタバン」（注2）が一部で注意されてきたが、ミャンマーの陶磁史をまとめて叙述しようという試みはながらくなされていなかった。ミャンマーのやきものが近年、陶磁研究者のあいだで改めて強く意識されるようになったきっかけは、1983年から話題として広まったタイ、ターク県メソットにおける緑絵陶器の発見（注3）であった。盗掘によって急激に市場に出回ったこの緑絵を含む白釉・緑釉陶器の一群は、産地不明のやきものとして注目され、当初、タイ説、イスラーム圏説なども出されたが、その後の議論を経て、現在はミャンマー製であるとの推定が一般化している。その間、インドネシアのスマラ・アジャットマンがいち早く1984年11月にミャンマーを訪れてまとめた論考〔文献1〕は、ミャンマー陶磁に関する総合的な著述として最も早いものといってよいであろう。しかし、そこでは外国産以外の青磁については触れられていず、ミャンマー青磁の存在自体がまだ認識されていなかった実情がうかがわれる。ミャンマーの青磁について具体的に論及した文献としては、おそらくジョン・ショウの著作〔文献2〕が最初である。彼はそこで疑問符付きながら、ある種の青磁小壺の類をミャンマーの可能性をもつものとして挙げている（注4）。次いで、ロクサナ・ブラウンが多くの留保をつけながらも、ミャンマーで青磁が生産されていた可能性を述べている〔文献3〕。これらが1980年代までのミャンマー青磁に関する主な論及であるが、確実な窯址情報が欠けていた。このような状態に一応の決着をつけたのがドン・ハインによるラグンビー窯の発掘で、ミャンマーで青磁が焼かれていたことが確実となった。今のところ、青磁を焼いた古窯址で発掘調査が行われたのはラグンビーとトワンテとナップドーの3地域であるが、以下に、前2箇所を中心にミャンマーの青磁について略述する（注5）。

ラグンビー窯

ドン・ハインのあと、同窯を再調査した Daw Aye Aye Thinn の報告〔文献4〕によって概要を紹介する（注6）。

【位置】ラグンビーは、ヤンゴン―バゴー公路の途中、ヤンゴンから27マイルにある古代都市遺跡で、ラグンビン川がその北限を区切っている。この町は1187年に築かれたハンタワディ（バゴー）の衛星都市のひとつである。施釉陶磁を焼いた窯址は、ラグンビー遺跡とバゴー山系の周囲に多数認められるというが、発掘調査で確認されているのはLGB(2)と名づけられた遺跡中にある1窯址のみである。ここはラグンビン川と都市遺跡のモ

ート（濠）で囲まれていて、中の島のようになっている。窯址の上には仏塔が建てられていた。

【調査】LGB(2)内の窯址は、1990年にドン・ハインによって、仏塔を動かさずにすむ部分で燃焼室の一部が発掘され、横炎式の地上窯であることが確認され、1号窯と名づけられた。その後1998年9月に考古局長のU Nyunt Han と Myo Thant Tin の指導で予備調査がなされた。そして同年12月から翌年2月にかけて考古局のU Myo Min Kyaw や Daw Aye Aye Thinn らによって2本のトレンチ（5×70 フィート）が掘られた。トレンチのひとつは焼け土と破片と灰の層が認められ、おそらく地下窯（複数）による土器焼成の行われた場所と考えられたが、窯体はつぶれてしまっていた。LGB(2)北側では13×17 フィートの方形の煉瓦列痕跡が見られ、煉瓦が城砦のそれと同じであることから、この煉瓦列が城砦建設と同時期であると推定された。ここからは炭、銅の破片、カオリンのような白い粉状物、滓、石製品などが発見され、倉庫か工房であったと考えられた。1号窯から81フィートの位置である。

結局、LGB(2)では1号窯以外には施釉陶磁の窯が発見できなかった。考古局では仏塔を動かして1号窯を発掘することに決定した。仏塔を移動させると、釉薬のかかった支焼具とやはり釉薬のかかった煉瓦が大量にみつかった。これらは仏塔の基礎に使われていた。煙突部と燃焼室とで煉瓦列が残っていた。窯の長さ38.6フィート、幅（窯壁内）16フィートであった。下の層には炭と土器片があったので、地上窯は野焼きの場所の上に築かれたものと想像された。

1号窯の周囲では施釉器物の破片が散乱していた。大部分は青磁で、緑褐色を呈していた。これらは碗、皿、小壺の3種に分類できる。陰刻による花文や線の施されたものがあつた。施釉碗のいくつかには陶工名と推定される字が彫り込まれていた。

支焼具には2種類あつて、高い円柱形のもの、平底の円盤形のものである。前者が大部分である。これにはまた2種類あつて、底部が外反するものと、糸切りされた平底のものである。最大のもので径11センチであった。

なお、LGB(2)の採集品の3分の1は土器で、その大部分は丸底のクッキングポットと蓋である。これらにはさまざまな印文が施されていた。また、陰刻線や縄文も見られた。そのほか、土玉が見られ、最大のものは径12.86センチであった。

【年代推定】ドン・ハインは1号窯の築窯時期を11世紀～13世紀の間とし、報告者もそれに同意している。根拠としては、城市の壁の建設が1178年で、その煉瓦と同じものが倉庫または工房とみられる遺跡から発見されていることがあげられている（注7）。

【報告者の結論】LGB(2)では長期にわたってやきものが作られており、最初は野焼きによる低火度焼成の土器、その後、穴窯による丸底のクッキングポットと蓋などが作られ、引き続き横炎式の地上窯による施釉陶磁器の生産に転じたとみられる。この最後の窯は未焼成煉瓦を使って築かれているが、火道が2フィート程度の高さしかなく、支焼具もあまり大きくないところから、比較的小さなもののしか焼けなかったと考えている。また、近くに他の窯が見られないことから、この場所はたぶん洪水が多く、あまり長い間は使われずに放棄されたのではないかと推定される。

以上が報告の概要であるが、年代推定には問題があるかもしれない。ハンタワディは14世紀から16世紀にかけて重要な城市として機能した場所で、ラグンビーの窯がハンタワディの動静と連動していた可能性は大きいであろう。しかし、このことは窯、製品のさらなる分析とバゴー近辺の調査の進展をみて再考すべきことである。

トワンテ1号窯、2号窯

トワンテでは2基の窯が発掘されている(注8)。発掘を担当したDaw Babyの報告[文献5]に基づき概要を紹介する(注9)。

【位置】ヤンゴンからヤンゴン河を西に渡ったところにあるダラから車で1時間ほど行くとトワンテに着く。窯址はトワンテ・タウンシップのTawgyitan regionのParda village、Kyauk-phyar-san-Kangyigone村の小川に沿った傾斜地にある(Site No. TTE1)。

【調査】1999年3月28日～5月11日に考古局のU Min Wai, Daw Babyらによって、いちばん近いところで相互に5メートルほどの距離にある2基の窯址(1号窯、2号窯)が発掘調査された。ともに似た構造の横炎式地上窯である。

1号窯:長さ40フィート、幅17.9フィート、周長約90フィート。2号窯:長さ38フィート、幅17.5フィート、周長約89フィート。いずれも未焼成煉瓦による築造で窯壁の下部が残っていて、特に2号窯はほぼ周壁の全体が見られたが、天井は崩落していた。

出土物の大多数は青磁碗、皿(盤)、支焼具、象形玩具である。釉色は緑青色。両窯で施釉器物は2300以上発見された。皿(盤)と碗は轆轤製であるが、玩具は手づくねである。皿(盤)は高さ3cm、径11cmの小さなものから高さ8cm、径30cmの大きなものまであり、碗にも大小があるが、高さ4～5cmである。施釉支焼具は高さ5cmから52cmまでの差があり、径の最大は13cmである。

【年代推定】他の遺跡からの出土物と比較して、15～17世紀の間に築窯されたものと推定した。

【報告者の結論】発掘された窯以外にもトワンテには多くの窯址が確認されており、この地が15～17世紀の下ミャンマーにおける施釉陶磁器生産の中心地であったことがわかる。

以上が報告の概要である。現地で見ることのできた出土品の特徴を補記すると以下のようである。

碗は口径12cm前後の丸碗が多く、少し小ぶりのものも見られる。削りは粗く、高く畳付の狭い高台がつく。無文のものが主体であるが、少量、刻文をもつものがある。高台内は無釉で支焼具との溶着を防いでいる。釉色は若干黄褐色を帯びた灰緑のものが多くあったが、しばしば見込みに釉溜りがあり、深い緑青色を呈していた。

盤は直壁のものと口縁を張り出したものがあり、正確な採寸ではないが、高台径が口径の2分の1を超えるような大きめで低い高台をもつ。やはり無文が多いが、口縁下に沈線、内底に輪状の沈線をもつものがあったほか、内底中央に火炎条の花弁をもつデザイン化された花文が陰刻されているものがあった。釉色、高台内無釉などの特徴は碗と同様である。

象形品には鳥形、象などの四足動物を表したものがあり、後者には灯火器が含まれていた。

そのほか高杯や月餅のような形状で外側に縦に溝を巡らせ中心に穴のある魚網の錘のようなものなどがあった。

特徴的なのは支焼具で、円柱形をなし、上端径がやや大きくなっている。外形はタイのシーサッチャナーライ窯址などで見る円筒形支焼具に似ているが、それらが上下に通貫する管状であるのに対し、器皿を受ける上面が平坦面をなしている。そのため器皿の高台内には円形の置き跡が残ることになり、出土品がそれを裏付けている。

トワンテの他の窯址

トワンテでは上記の報告にもあるとおり、青磁破片の散布地や窯体の露出した場所がPauk-Kone villageやMya-Nyein village近辺に少なくとも10箇所以上確認されている(注10)。

1999年9月にそのうちの3箇所を訪れることができた。いずれも濃密な竹林のなかにあり、時間の関係で詳しい踏査はできなかったが、周辺を一見する限りでも各々10基を超える窯体が見られた。一帯が大規模な青磁生産地であったことは確実である。

窯構造は、表面観察ではあるが、1号窯、2号窯と類似する煉瓦積み地上窯で、両窯よりはやや小ぶりのものがかかり認められた。製品には、各窯に大きな差異はなく、青磁の碗と盤が主体のようで、特徴は多く1、2号窯に共通していた。碗はやや高めの高台のつく丸碗で、無文のものが多かったが、外側に蓮弁の変形のような剣先形文や斜め格子状の刻文のあるものがあった。盤は直壁、端反りのほか鰐縁のものがあり、やはり無文が主体であるが、口縁部に連続弧線を入れたり、内壁に条溝文、内底に環状の刻線や花文、外側に線条文を刻んだりしたものも見られた。釉色は緑青色を帯びたものが多く、濃淡があり、少数ながら褐色に発色したものもある。しばしば部分的に釉溜りを生じているものがあり、釉中に白濁ないし青白の不透明釉の混ざるものがかかり見られた。胎は精製度が低く粗い感じで、灰色、淡灰褐色ないし淡灰黒色を呈するものが多かった。やはり各窯で円柱状の上面が平坦な支焼具が多く見られた。クッキングポット形の印文のある褐色の土器片が散見されたが、同所

の製品であるかどうかは不明である。

以上が表面観察で知れた窯址と製品の概要である (注 11)。

トワンテ青磁窯の特徴

1 号窯、2 号窯を含めて短時間での表面的な観察であるし、広大な窯址群のごく一部の知見であるので、結論的なことを述べるのは難しく、また結論を急ぐべきものでもないが、とりあえずトワンテ青磁窯およびその製品の特徴を述べると以下になるであろう。

【窯構造】既知のなかから最も近いものを求めればタイ、シーサッチャナーライの地上窯段階のものである。煉瓦による築造で舟形をなし、燃烧室から直立して段差のある焼成室に続き、床の傾斜はあまり強くない。ただし、1 号窯、2 号窯には焼成室に入ってすぐに 2 本の柱状施設の痕跡があり、これが天井部まで続いていたとすれば屋根を支えると同時に分炎の役割を担っていた可能性がある。このような構造の窯は管見の限りではタイにない (注 12)。このような構造がミャンマー独自のもののなか、なかでもトワンテに特徴的なものなのか、といった問題は今後の研究課題である。

【製品】碗、皿の形、装飾はタイの青磁を連想させる。シーサッチャナーライの製品に類似するところもあるが、管見のなかでは北タイのパーンの製品に最も近いと考える。特に見込みの花文や環状文には共通性が認められる。ただし、シーサッチャナーライや北タイの精品に対応するような上製品は見られず、どちらかという粗製に近い量産品という印象である。また、各窯の間で製品の差がほとんどないか、あってもそう大きくないように見えた。トワンテ全体としていうには時期尚早であるが、これまでに見た諸窯には大きな年代差は認められないように思う。

【支焼具】上述のとおり、上面平坦の柱状支焼具が特徴的である。メソットで大量に掘り出されたとされる白釉、白釉緑絵、緑釉陶器の底部には共通して円形の置き跡が見られ、同様の支焼具が用いられた可能性がある。現在のところ、これらの陶器を焼いた窯は明らかではなく、トワンテがその候補地のひとつに挙げられているが、これまで見てきたトワンテの青磁窯で並焼された可能性はないであろう。

おわりに

これまで見てきたトワンテの諸窯はタイとの近縁をうかがわせる要素が多く、影響関係の有無、あったとしたらどのようなものであったのかが問題となる。ドン・ハインらの研究 (文献 6) によれば、シーサッチャナーライでは土手ないし斜面を掘り抜いた穴窯 (bank kiln) から煉瓦積みで地上窯への変遷が辿れるようであるが、ミャンマーの窯址調査はまだその緒についたばかりで比較検討の材料が少ない (注 13)。ただ、トワンテ 1 号窯、2 号窯では窯が重層的に築かれていた形跡はなく、窯壁にも張り替えて長期に使用した痕跡は見られなかった。他の個

所における窯の散布状況からも短期間に集中的に築造されたのではないかという印象を受ける。大規模な生産を支えるには大きな需要がなければならない。本誌の佐々木達夫、佐々木花江による論考にあるように湾岸地域にはトワンテ産と考えられる青磁が相当量搬入されており、今後東アフリカでも発見が期待される。内需についてはなお不明であるが、広大な範囲にわたる青磁窯の運営の背後には西方に対する強い輸出ドライブが働いていたのではないかと推測している (注 14)。トワンテ近辺の窯場はいずれも水流から近く、それらはトワンテ運河につながり、さらにはダラでヤンゴン河に入り、外洋に出ることができる。トワンテ運河には波止場であったと推定されている場所があり、現在も川岸には多くの土器片、青磁片、白釉緑絵片などが散布している。中国青花も見られることから、それらすべてが必ずしもトワンテの製品でないことは明らかなが、トワンテで焼かれた多くの製品がこの運河を通じて流通したことは間違いない。

焼造年代に関しては今のところ決め手がない。タイの窯、製品との類似から漠然と 15 世紀を中心に考えている。ラグンビーの 1 号窯についても先述のとおり、既知のトワンテ諸窯とあまり大きな年代差はないのではないかと推測している。なお、パテイン地方のナップドーでも青磁を焼いた窯が発見され、一部が調査されている (注 15)。三叉トチンを使って支焼しているのが大きな特徴であるが、詳細は改めて報告の機会をもちたい。

注 1 『蛮書』巻 10 「以青磚為円城」、『新唐書』巻 222 下 「琉璃為壁」など。

注 2 「……マルタバーン壺四個——それは生姜、胡椒、レモンとマンガーが一杯に入った大壺のことで……」 (家島彦一訳注『大旅行記』6 平凡社 2001)

注 3 プジョン・チャンダヴィの教示による。

注 4 ショウの述べるように、私もミャンマーと国境を接するタイ、メーサイの古美術商でミャンマーから集荷してきたという青磁小壺の類を見せられたことがあるが、それ以上の産地に関する情報は得られなかった。

注 5 この一文は 2001 年 3 月 2 日に金沢大学文学部考古学研究室で行われた研究会「東南アジア陶磁器の生産と流通」において発表した内容に基づいている。その後、西田記念東洋陶磁史研究助成基金の助成を得て、2002 年 2 月から 3 月にかけて、私は佐々木達夫、佐々木花江、津田武徳、Myo Thant Tyn とともに下ミャンマー一帯の窯址を調査する機会をもったが、この折の知見については機会を得て別途報告したい。

注 6 注 5 の調査時にラグンビー窯址は小さな池となって遺構は水没していた。

注 7 ラグンビーの窯址出土品を見ていないが、その窯の形、大きさ、窯道具などには後述のトワンテ諸窯との共通点が多く、近接した稼働年代も想定しうる。

注 8 2002 年 3～4 月に Phaya-Gyi (Phalet-Kyi) にある 1 基の窯が考古局によって発掘され、日本からは津田武徳が参加したが、2002 年 8 月現在、報告書は未刊である。

注 9 この 2 基の窯址は発掘後、覆屋をかけて保存措置が講じられている。私は 1999 年 9 月にバガンで開催された Conference on Glazed

Ceramics of Southeast Asia に伴うエクスカベーションで現地を訪れ、2002 年 2 月に再訪した。これは 1999 年 9 月段階での知見による。その後、窯址の発見数は大幅に増加しつつあり、注 8 に記した窯址もそのひとつである。また、トワンテ・タウンシップに隣接するコウム・タウンシップにも窯址があることが確認されている。2002 年の踏査では、トワンテ一帯でも窯によって生産器種の違いや比率に差があるかも知れないという印象を受けた。それがどの程度か、また窯同士の水平的分業によるのか、時代差によるのかといった点は今後の研究課題である。発掘されたクメールの窯（バン・クルアットおよびタニ）では窯の中心線上に列柱があるが、トワンテの窯とは数、位置、方向を異にする。

注 13 津田武徳によれば、パテイン地方のミャウンミヤに煙突だけを地上に出した地下式の窯がある（「ミャンマーの陶磁器と窯跡」1999 年 7 月 18 日陶磁談話会発表資料ほか）。私も 2002 年 3 月に現地でそのひとつに煙突から入ってみたが、内部は土で埋まっていた構造を把握することはできなかった。また同地ではドン・ハインによって 2 基の窯が発掘調査されている。ひとつは斜面を利用した地下窯で焼締めを焼き、他はやはり斜面に築かれた半地下窯のようで黒釉陶器を焼いていたという。

注 14 タイのメソット、オムコイやフィリピンでも類似のものが見られるという〔文献 3〕。私もメソット出土といわれるものでミャンマー青磁と考えられる盤をバンコクで見たことがあるが、立地からいっても西方が主たる輸出先であったのではなかろうか。

注 15 2001 年 3 月 2 日に金沢大学文学部考古学研究室で行われた研究会「東南アジア陶磁器の生産と流通」において津田武徳がスライドを交えて発表した。私も 2002 年 3 月に現地で確認した。

文献

Adhyatman, S., Burmese Ceramics, The Ceramic Society of Indonesia, 1985
Shaw, J. C., INTRODUCING THAI CERAMICS also BURMESE and KHMER, Chiang Mai, 1987

Brown, R. M., THE CERAMICS OF SOUTH-EAST ASIA Their Dating and Identification, 2nd ed., Singapore, 1988

Daw Aye Aye Thinn, THE EXCAVATION AT LAGUNBYEE KILN SITE, 1999 (Conference on Glazed Ceramics of Southeast Asia の paper)

Daw Baby, EXCAVATION OF ANCIENT KILNS NEAR KANGYONE VILLAGE IN TWANTAY TOWNSHIP, 1999 (Conference on Glazed Ceramics of Southeast Asia の paper)

リチャード・リチャーズ、ドナルド・ハイン、ピーター・バーンズ、ピシート・チャルンウォン「スコタイ時代の古窯址と出土品」『世界陶磁全集 16 南海』東京 1984。

Hein, D., Burns, P. and Richards, D., SAWANKHLOK EXPORT KILNS — Evolution and Development, 1986 (タイピングによる論文) ほかいくつかの論考がある。
(文中、敬称を略させていただきます。)

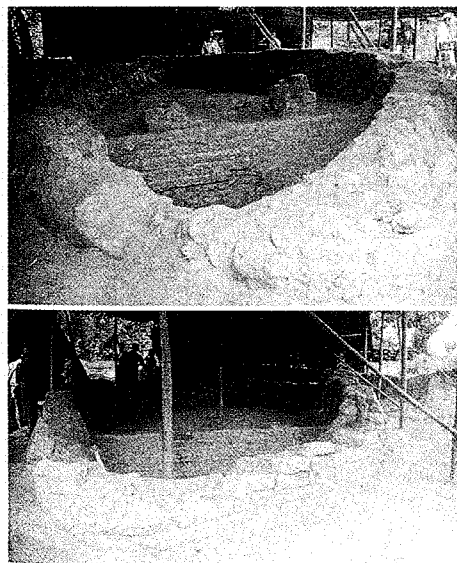


図 3, 4 トワンテ 1 号窯跡 (上)
トワンテ 2 号窯跡 (下)

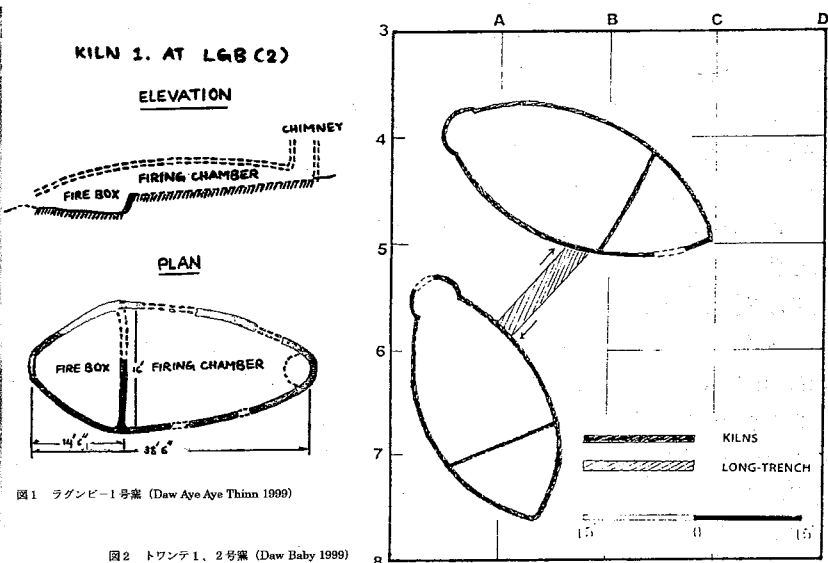


図 1 ラグンビー 1 号窯 (Daw Aye Aye Thinn 1999)

図 2 トワンテ 1, 2 号窯 (Daw Baby 1999)

図 1 ラグンビー 1 号窯跡 (左) とトワンテ 1・2 号窯跡 (右)